

教育実習の効果的な指導の在り方

A Method of Effective Practical Teacher Training in Infant Education

開 仁 志

HIRAKI Hitoshi

I 目的

筆者は、幼稚園現場の教諭として教育実習において実際に学生を指導した。その後、本学幼児教育学科で教育実習担当の任にあたっている。

しかし、現場において同僚同士で学生の具体的な指導の仕方を話し合ったり、大学教員と情報交換をしたりする場が多いとは言えないことを感じていた。そのため、保育者として必要だと思われる経験を各担任がそれぞれ考え、実習を進めていく実状がある。

そのような状況を改善するために、教育実習における効果的な指導の在り方について明らかにし、今後に生かしたいと考える。

そこで、本研究の目的を以下の3点とする。

- 1 指導教員が教育実習のねらいとして何を重視しているのかを明らかにする
- 2 学生への効果的な指導の在り方を探る
- 3 大学との連携の在り方を探る

II 方法

1 指導教員アンケート

付属みどり野幼稚園担任6名（以下指導教員）に記述式アンケート（無記名）を配り、後日回収し、考察する。

(1) 指導教員内訳（全て女性）

保育者歴10年未満：1名

保育者歴10～20年：3名

保育者歴20年以上：2名

計 6名

(2) 実施期間

2005年8月実施

(3) 回収率

6名中6名（100%）

2 学生用アンケート

付属みどり野幼稚園教育実習全日程終了後、本学幼児教育学科2年生101名（以下学生）対象に記述式アンケート（無記名）に授業中記入してもらい直ちに回収し、考察する。

(1) 学生内訳

女子 97名：男子 4名：計 101名

(2) 実施期間

2005年7月21日実施

(3) 回収率

101名中99名 (98%)

III 結果及び考察

1 指導教員用アンケート結果

(1) 指導において心がけたこと、大事にしたこと

回答内容を筆者により分類すると、以下の4項目が挙がってきた。

- ① 保育者自身の在り方
- ② 子どもの見方・かかわり方
- ③ 学生へのかかわり方
- ④ 園・保育者の思い

1) 保育者歴による傾向

①保育者自身の在り方、②子どもの見方・かかわり方については、保育者歴に関係なく出てきた内容である。指導教員が全て重視している点と言えよう。③学生へのかかわり方、④園・保育者の思いの項目は、保育者歴10年以上の指導教員の記述内容に出てくる。保育者歴と指導教員歴は、ほぼ一致することから指導教員歴が長くなるにつれ、具体的な学生へのかかわり方を身につけ、園・保育者の思いを伝えようとする傾向が見られる。

2) 回答内容考察

① 保育者自身の在り方

「教師と学生という関係ではなく、人と人の関係で保育について共に考えるようにする」、「学生からも学ぶ」などの記述が見られた。

このことから、指導教員自身が1人の人間として学生と接し、謙虚な姿勢で実習指導にあたっている様子がうかがえる。

② 子どもの見方・かかわり方

「発達年齢に応じて、子どもの側に立ったねらいをもつ」、「子どもの受容」、「子どもを一人の人間としてとらえる」などの記述内容が見られた。

このことから、幼稚園教育要領における子ども観を学生に伝えるよう指導教員が心がけていることがわかる。

③ 学生へのかかわり方

「意欲と指導のバランスを考える」、「自分たちで気付くことができるような話し合いの場を設ける」、「保育の楽しさを学生自身が感じられるように」、「学生の思いを受け止める」、「学生のよさを見つけて伝える」、「次のステップになるように疑問点を解決し（失敗体験のままにしない）、気遣いや技術を教え、学内実習が学外実習や就職に生かされるようにする」などの記述が見られた。

このことから、学生の主体性を大切にし、なるべく自分たちで課題に気付くことができるようにすることや、学生の思いを受け止め、人格を認め、意欲を高めるように努力している姿が推察される。また、今後につながるような基礎的体験として学内実習を位置付ける努力が見られる。

④ 園・保育者の思い

「園・保育者の思いを伝える」、「いろいろな園の方針があることを伝える」、「ねらいや計画を伝え、保育の流れを感じることができるようにする」などの記述が見られた。

このことから、保育の背景にある子ども観、保育観をしっかりと伝えること、園独自の保育観についても伝えることを心がけてい

る様子がわかる。

(2) 指導で効果的だったこと

1) 回答内容分類

「指導で効果的だったこと」の中身を分類すると、「心がけたこと、大事にしたこと」と同じ4項目になった。このことから、指導教員が学生に「効果的に指導できた」と認識する内容は、「指導教員が何を心がけて指導したか」に規定されることを示していると考ええる。評価の観点から、指導の中身に結びついていると言えよう。

- ① 保育者自身の在り方
- ② 子どもの見方・かかわり方
- ③ 学生へのかかわり方
- ④ 園・保育者の思い

2) 回答内容考察

① 保育者自身の在り方

「子どもの成長を学生と共に喜んだり、見守ったり出来た」、「反省会で、担任が気付かなかった子どもの姿を学生が知らせてくれた」、「学生が子どもの遊びを広げるきっかけづくりになってくれる」などの記述が見られた。

指導教員自身が心がけた「一人の人間として学生と接し、学生からも学ぶ姿勢」が効果的に働いている。

② 子どもの見方・かかわり方

「学生が、どの子のどんな姿もかわいいと言ってくれ、子どもの持ち味を広く受け止めていると感じた」などの記述が見られた。

幼稚園教育要領に示される子ども観を保育者が伝え、それが学生に伝わったことが指導教員の手応えとして感じられている。

③ 学生へのかかわり方

「互いに足りないところを補い、チームワークがとれた」、「子ども、学生、保育者共に充実感を味わっていた」などの記述が見られる。

保育者の在り方にもつながるが、学生自身も「1人の保育者」として指導教員と協力していくようなかかわり方が効果的と考える。

④ 園・保育者の思い

「子どもの姿からねらいをもち、内容として活動を進めていくことが『わかった』と言われた」、「思いが伝わり、思いがつながり、保育を高められた」などの記述が見られる。

園・保育者の思いをしっかりと学生に伝え、それが学生に受け止められたことが指導教員の充実感につながっている。

(3) 指導における疑問点、悩み

1) 回答内容分類

内容を分類すると、指導教員が心がけた4項目がここでも挙がった。指導において心がけたことが効果的に学生に伝わらないことが、悩みの要因になると言えよう。さらに、本幼児教育学科では、1年間をかけて約200名の学生が附属みどり野幼稚園での教育実習に参加するため、実習の形態についての悩みが全指導教員に見られた。そのため、5項目が疑問点、悩みとして挙げられる。

- ① 保育者自身の在り方
- ② 子どもの見方・かかわり方
- ③ 学生へのかかわり方
- ④ 園・保育者の思い
- ⑤ 実習形態

2) 回答内容考察

① 保育者自身の在り方について

「自分自身の指導力が不足しているのではないか」、「指導の在り方が、各クラスに任されていて不安」などの記述が見られた。

どのように学生を指導するかという評価の観点の評価表において示されているが、具体的な指導の在り方については、各々の指導教員に任されていることが、不安につながっていると推測する。

② 子どもの見方・かかわり方

「保育者像が学生と指導教員で違う。(担任実習でも1人しか見ようとしない学生)」などの記述が見られた。

学生は、みどり野幼稚園で、最初の担任実習を行う。学生は、一人一人の子どもを大切に子ども観、保育観をもっているが、担任という立場から全体を見る目がまだ養われていないと言えよう。

③ 学生へのかかわり方

「グループの構成メンバーによる個性の違い」、「学生の力量によって活動内容が違う」などの記述が見られた。

学生にも力量の差や個性があり、指導教員にも様々なかかわり方が求められる。指導教員は園児に加え、学生にも対応しなければならない難しさがあると推察される。

④ 園・保育者の思い

「学生の思いと保育の流れ、その時期の保育、指導教員の思いとのズレがある」、「保育の流れ、保育の意図が伝わっているか不安」などの記述が見られた。

学生の中には、やりたい保育を自分たちな

りに考えている者もいる。しかし、実習においては、それまでの子どもの生活の流れや、それを支える園・保育者の思いが存在する。保育を支える背景をどこまで伝え、学生が理解した上で保育できるかが課題となっている。

⑤ 実習形態について

「2年生は3日間で実習期間が短く、子ども理解が不十分」、「担任指導が1回のみなので、自由保育か一斉保育かどちらかしかできない」、「子どもの数に比べ、学生が多すぎる。指導教員が学生一人一人に対応できないし、3歳児の子どもが不安がり、登園拒否も見られる。保護者からの相談もある(特に観察実習)」などの記述が見られた。

本学幼児教育学科では、1年生後期に観察実習、2年生前期に参加実習を行う。学生数が約200名、幼稚園のクラス数が5クラスなので、1クラス、単純計算で、40名の学生がかかわることになる。特に、1年生後期の観察実習では、半日の間50名の学生が園児を観察することになり、園児が不安になる傾向にある。今後、改善を要すると言える。

(4) 大学教員に対して実習とのかかわりで望むこと

1) 回答内容分類

回答内容を分類すると、以下の4項目が挙げられた。

- ① 大学教員との連携・協力
- ② 実習改善に向けて
- ③ 学生へのかかわりについて
- ④ 実習と授業のつながり

①の大学教員との連携・協力においては、

保育者歴に関係なく、全ての指導教員に記述が見られた。②の実習改善に向けては、保育者歴10年以上の指導教員に、③学生へのかかわりについて、④実習と授業のつながりにおいては、保育者歴20年以上の指導教員に見られた。経験が上がると、大学教育全体の中での実習の位置関係まで視野に入れていることがうかがえる。

2) 回答内容考察

① 大学教員との連携・協力

「園・子どもの様子をたくさん見に来て、様々な分野で相談・協力」、「園の方針を伝え共に話し合いをして保育を高めたい」、「現場にいるともてない客観的な目で、側面からの専門的な指導が欲しい」、「子どもの実態をふまえたねらい・内容の持ち方などの勉強会を行って欲しい」などの記述があった。

保育を行う指導教員自身の力量を高め、大学教員と園が協力して保育をよくしていきたいという思いが表れている。

② 実習改善に向けて

「実習生、実習時の様子、園の様子を見学し、よりよい実習にして欲しい」、「実習園の指導教員、子どもの悩み、負担を分かって欲しい、努力を知って欲しい」などの記述が見られた。

実習をどのように進めていくか、実習園に任せきりではなく、共に実習の在り方を考える存在として大学教員のパートナーシップを求めていると考える。

③ 学生へのかかわり

「学生の生き生きと頑張っている姿を受け

止めて欲しい」「部分担任だけでも見て欲しい」などの記述が見られた。

講義、演習は大学、実習は実習園という分け方ではなく、学生を共に育てる視点が求められている。

④ 実習と授業のつながり

「実習と授業が結びついていてくれるとうれしい」、「実習と授業のつながりを教えてもらう交流の場が欲しい」などの記述が見られた。

授業と実習のつながりは、教員養成を総合的にとらえる上で、今後ますます問われていく課題であると認識する。

(5) 実習についての意見・感想

実習について自由に意見・感想を述べてもらったところ、実習におけるメリット面、デメリット面が明らかになった。さらに、今後実習をどのように改善するかについての意見が出されている。

1) メリット面

「様々な目で子どもを見てとらえられる」、「保育者だけではできないきめ細やかな対応ができる」、「反省会で指導教員自身も自分の保育を振り返り確かめ、勉強になる」、「子どもの友達関係が広がった」などの記述がある。

子どもを見る目、対応する手が増えることで、よい影響が見られた面である。

2) デメリット面

「短期間で学生が入れ替わるので、活動を膨らますのが辛い」、「見られることにストレスを感じる子どもの存在」などの記述が見

られる。

2年生の実習が週ごとに学生が代わることで、子どもの生活の流れとかみあわないことが指摘されている。さらに、1年生の観察実習では、見られることにストレスを感じる子どもの存在が問題となる。

3) 実習改善に向けて

「限られた時間だが、充実した時間にした」、「事前・事後指導は大学でやってくれてありがたい」、「アンケート結果を今後に生かして欲しい」、「他園の実習の様子、反省点を教えてもらい、参考にしたい」などの記述が見られた。

今後、実習をよりよいものにしていくために、他園の実習の在り方も参考にしつつ、アンケート結果の検討を大学教員、現場の指導教員が協力して進めていきたい。

2 学生用アンケート結果

(1) 指導教員に受けた効果的な指導

1) 回答内容分類

筆者により回答内容を分類したところ、以下の7項目になった。

- ① 保育者自身の在り方
- ② 子どもの見方・かかわり方
- ③ 学生へのかかわり方
- ④ 園・保育者の思い
- ⑤ 保育技術
- ⑥ 保育計画・記録
- ⑦ 保護者との連携

指導教員が心がけている①から④の項目がここでも同様に見られ、学生に指導が伝わっていることが推測される。しかし、指導教員

が心がけていること以外に、学生は⑤保育技術、⑥保育計画・記録、⑦保護者との連携の項目で指導が効果的であったと指摘している。この3項目は、指導教員の意識の上ではのぼらなかったが、学生にとっては重要になる項目になってくるのではないかと考える。

2) 回答内容考察

① 保育者自身の在り方

「保育者が子どもと一緒に遊んで遊ぶことの大変さ」、「自分の心を開くこと」、「保育者のあせりが子どもに伝わること」などの記述が見られた。

指導教員が心がけていた「一人の人間として接すること」が学生にも伝わっている。

② 子どもの見方・かかわり方

「発達段階をよく見ること」、「子どもを待ち、見守ることの大変さ」、「受容や共感の大変さ」、「子どものほめ方」、「一人一人への対応の仕方」などの記述が見られた。

幼稚園教育要領を基にした子ども観、保育観が学生に実感として伝わっている。

③ 学生へのかかわり方

「積極的に迷わず行動すること」、「自分でやることを見つけること」、「失敗にくよくよせず、次に生かすこと」、「思いをたくさん聞いてくれてアドバイスしてくれた」、「次の実習につながるようなアドバイスがあった」などの記述があった。

指導教員が、「一人の人間として温かく学生に接してくれたこと」、そして、「今後の保育に生かすことができるようにと将来まで見越した指導をしてくれていること」が、学生の心に残っていると考える。

④ 園・保育者の思い

「生活の流れを大切にすること」、「子どもの目線、立場に立った環境構成の在り方」、「保育者が一方的に話すのではなく、子どもの反応を見ながら話し合いをするまとめ方」、「子どものことを丁寧に話してくれた」などの記述が見られた。

指導教員が率直に自分たちの園・保育者としての思いを語ることで、保育の背景にある子ども観、保育観が伝わっている。

⑤ 保育技術

「絵本の読み聞かせの仕方」、「保育者の立ち位置」などの記述が見られた。

指導教員の心がけには表れてこなかったが、学生にとっては、「実際にどうするか」は、重要な指導になるようである。知識では知っていても実際にどうするかが保育経験の浅い学生にとって最初に直面する難しい課題になると言える。

⑥ 保育計画・記録

「指導案どおりにいなくても、子どもが楽しむことが大切」、「活動の前の準備の大切さ」などの記述が見られた。

指導案で考えた保育時間までの準備を自分たちで実際にやることによって大変さや大切さを実感している様子がわかる。また、指導案はあくまでも案であり、子どもの姿をふまえ臨機応変に対応しなければならないことを体験を通して学んでいっている。

⑦ 保護者との連携

「保護者との連携が重要」、「子どもが保護者と離れる寂しさを抱えて、幼稚園に来る」などの記述があった。

指導教員が、子どもの背景を伝える際に出てくる内容である。しかし、実習段階でどこまで保護者との連携のことを伝えることができるのかは今後の課題となるだろう。

(2) 指導教員にさらに求める指導

1) 回答内容分類

指導教員に教えて欲しい項目は、効果的だった指導と比べると「保育者自身の在り方」の項目が消え、後は同様の以下6項目となった。「保育者自身の在り方」については、指導教員の指導が成果を挙げている結果だと考える。

- ① 子どもの見方・かかわり方
- ② 学生へのかかわり方
- ③ 園・保育者の思い
- ④ 保育技術
- ⑤ 保育計画・記録
- ⑥ 保護者との連携

2) 回答内容考察

① 子どもの見方・かかわり方

「気になる子、障がいをもった子への対応」、「子どものトラブルへの対応」、「子どもへの注意の仕方」、「一人一人の特徴を詳しく知りたい」などの記述が見られた。

実習期間が、2年生は3日間と短いことから、子ども一人一人を理解するところまでいけない実状があると考ええる。また、トラブルの解決の仕方は、学生が悩みやすい所と言えるだろう。

② 学生へのかかわり方

「保育の流れがあるのはわかるが、もっと自分たちに任せて欲しい」、「もっとほめて

欲しい」「もっとその場で指導して欲しい」、「1日の流れを示して欲しい」、「若い頃の話が聞きたい」などの記述が見られた。

「学生自身を認め任せて欲しい」という意見と、「もっと指導して欲しい」という意見に分かれた。学生の意欲と、指導教員の指導の程度のバランスについては指導教員のアンケートでもその難しさが挙げられている。

③ 園・保育者の思い

「保育の見通しの持ち方」、「流れに沿った保育の在り方」、「環境構成の在り方」、「子どもにどこまで自由にさせてよいのか」などの記述が見られた。

子ども主体の保育を進めるにあたって、実際にどのような援助が必要なのかを知りたいとする意見があると考えられる。

④ 保育技術

「ゲーム、ダンス、手遊びを教えて欲しい」、「部分担任で実際行った遊び以外に何ができるか知りたい」などの記述が見られた。

学生は、実際に使える保育技術を増やしたいと思っている。そのニーズに応じていく機会を設けていかななくてはいけないだろう。

⑤ 保育計画・記録

「指導案、日誌などを指導して欲しい。コメントが欲しい」などの記述が見られた。

指導案、日誌の書き方については、実際の子どもの目の前にしないと書きにくい面があるので、大学の授業だけでは不十分な面があると考えられる。今後も改善の余地がある。

⑥ 保護者との連携

「連絡帳の書き方を教えて欲しい」などの記述が見られた。

保護者に、学生が連絡帳を書くことは個人情報保護からも実現が難しいと言えるだろう。その中身についてどのように知らせていけばよいのか、検討課題となる。

(3) 大学の学びと現場のギャップはあるか

1) ギャップを感じた学生数

「ギャップがあった」とした学生が51名(52%)、「ギャップはなかった」とした学生が47名(48%)という結果である。(学生99名中、無回答1名含む)

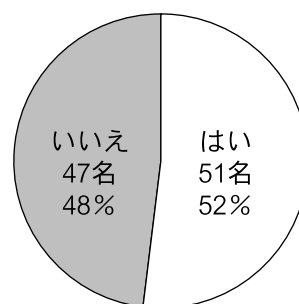


図1 ギャップを感じたか

2) ギャップの分類

「ギャップがあった」とした学生のギャップの内容を分類すると、以下の2項目になる。

① 理論と実践の違い

知識で知っていること、わかったつもりでいることと、実際やってみることは違うことに気付く。

② 理想と現実の違い

幼稚園教育要領に書かれてあったり、授業で習ったりした子ども主体の保育を必ずしも実践できていない場面を目にする機会があ

る。

①理論と実践の違いについては、今後経験を積み重ねることで学生自身が乗り越えるべき課題である。しかし、大学時代に、そのギャップが少しでも縮まるように努力することは今後求められるだろう。

②理想と現実の違いについては、理想どおりに実際の現場はいかない場合もあることを踏まえながら、それでも理想を求めて保育を進めることが大切であるという理念を大学の授業の中でも伝えていく必要があると考える。

(4) 大学の授業で実習に生かされたことは何か

回答内容を分類すると、以下の6項目になる。

① 心理系

「共感、受容、信頼関係の大切さ」

「トラブルの対処法の仕方を豊富な事例で説明されたこと」、「発達段階のこと」

「障害のこと」、「ロールプレイング」

② 音楽系

「手遊び」、「歌」、「音楽表現」

「ピアノ」

③ 造形系

「授業で作ったおもちゃ、作品」

④ 児童文化系

「絵本・紙芝居の読み方」、「パネルシアター」、「ペープサート」、「素話」

⑤ 体育系

「ゲーム」、「1年生で行った遊びの進め方」、「新聞遊び」

⑥ 保育計画系

「日誌、指導案の書き方」

「子どもの発達や心理を豊富な事例を元に学んだことで、頭に思い浮かべながら保育できた」という意見や、「実習が近くなると、各先生方が、すぐに役立つ実技を教えてくださいたりしてとても役だった」などの意見も多く、理論と実践の結びつきが目に見え、実感として感じ取ることができるような授業が実習との関連において評価されている。

(5) 指導教員へ実習以外で求めるかかわり

以下の4項目（複数回答可）で回答を求めた。

結果は、図2のとおりである。

- ① 実習以外で、幼稚園、保育所を訪れ、実際に子どもとかかわりたい
- ② 大学の授業で、実技（教育技術）を教えて欲しい
- ③ 総合演習など、研究テーマをもって、幼稚園、保育所を訪れ、実際に子どもとかかわりたい

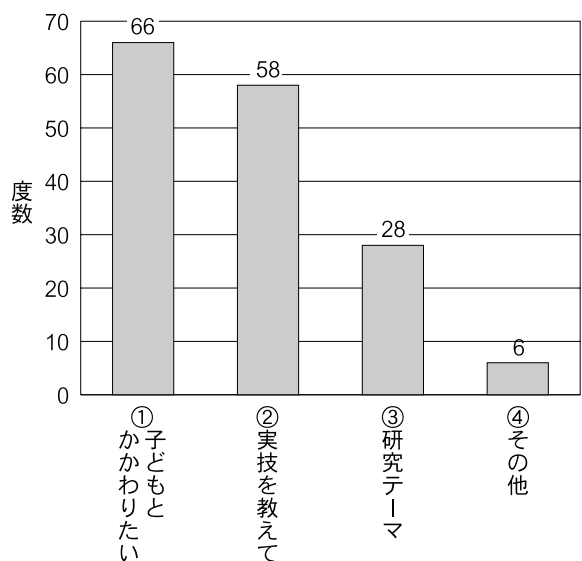


図2 指導教員へのかかわりの要望

④ その他

一番ニーズが高かったのは、「実習以外で、実際に子どもと関わりたい」（99名中66名、97%）で、次いで、「②大学の授業で実技を教えて欲しい」（99名中58名、59%）である。

本学幼児教育学科の附属みどり野幼稚園における実習では、観察実習が中心となっていることもあり、実際に子どもと触れ合いたいという要望は強いようである。さらに、実際に現場で使っている実技を教えてもらう機会があれば、今後すぐに生かせると考えている学生も多いのではないだろうか。

（6）教育実習についての感想・要望

1）自分自身に関して

「実習生が関わってよい領域がわからなかった」、「実習は、担任の先生がいたが、実際現場で一人になると考えると不安」、「担任実習は不安で大変だが、充実感がある」などの記述が見られた。

「実習生としての自分の在り方」を振り返り「これから現場に出て働く保育者」としての在り方を学生なりに考えている様子が見える。

2）実習と授業との関連

「2年生の実習は、授業を休まなくてはダメで、残念」、「実習期間を長くして欲しい」、「実習前に授業で実習にすぐに生かせることを教えて欲しい」、「手遊び、ゲームなどのレパートリーを増やしたい」、などの記述があった。

実習の形態に関しては、今後も改善の余地がある。現状では、3日間という短い期間しか連続で子どもと触れ合える期間はない。大

学教員、附属の指導教員共に話し合いを進めていかなくてはならない。

実習に生かせるような実技に関しては、現在も様々な授業で行っているが、学生からはさらに要望、ニーズがあるようである。今後とも一層充実していきたい。

3）保育計画・記録に関して

「日誌の書き方、指導案の書き方を1年生の早い段階で詳しく丁寧に教えて欲しい」、「前の年度で何をしたかの記録資料があれば、見たい」などの記述があった。

日誌や指導案の書き方を早い段階で詳しく教える時間を確保することが必要と言える。附属の指導教員は子どもの保育のこともあり、約200名の学生に対応することは難しい。毎年資料を積み重ね、生かしていくことも含め、検討していきたい。

4）指導教員について

「よい先生に出会えて、すごく勉強になった」、「担当の先生により内容が違う場合がある」、「学生時代の指導案を持ってきて見せてくれた先生がうれしい」、「先生が明るい、自分まで明るくなる」などの記述があった。

指導教員との出会いは、学生にとってかけがえのない財産となる。その出会いが実りのあるものになるように、学生、指導教員双方のコミュニケーションが深まるような体制づくりを進めなくてはならない。

IV まとめと今後の課題

1 指導教員が教育実習のねらいとして何を重視しているのか

回答内容を分類した結果

- ① 保育者自身の在り方
- ② 子どもの見方・かかわり方
- ③ 学生へのかかわり方
- ④ 園・保育者の思い

の4項目が重視する内容として挙げられた。保育者歴による若干の違いはあるものの、今後、何を学生に伝えていきたいかを話し合うことで、共通理解が図られ、今後の指導に生かされると考える。

2 学生への効果的な指導の在り方

回答内容を分類した結果

- ① 保育者自身の在り方
- ② 子どもの見方・かかわり方
- ③ 学生へのかかわり方
- ④ 園・保育者の思い
- ⑤ 保育技術
- ⑥ 保育計画・記録
- ⑦ 保護者との連携

の7項目が挙げられた。①から④までは、指導教員用アンケートによる「効果があった指導」と学生用アンケートによる「効果があった指導」についても同様の結果が見られた。このことから、指導教員が重視する項目が達成されているかが、効果的な指導であったかを示す指標となることが明らかになった。しかし、学生から出た項目、⑤から⑦について、指導教員が認識することで、より一層指導の効果が現れるのではないだろうか。

3 大学との連携の在り方

回答内容を分類した結果

- ① 大学教員との連携・協力
- ② 実習改善に向けて
- ③ 学生へのかかわりについて
- ④ 実習と授業のつながり

の4項目が挙げられた。

実習を教員養成の大切な要素として他の授業との関連性を研究し、大学教員と指導教員が共に協力して学生を育てていく体制づくりが一層求められている。

V 謝辞

4月に赴任したばかりの私を温かく迎えてくださった土井浩園長、青山仁副園長はじめ附属みどり野幼稚園の諸先生方、子どもたち、そして、武藤憲夫学科長はじめ幼児教育学科の教員、学生の方々のおかげで、研究を行うことができました。今後も学内の教育実習担当教員として、よりよい教育実習の在り方について研究していきたいと思っております。ありがとうございました。

〈参考文献〉

- 1) 文部省『幼稚園教育要領解説』初版、フレーベル館、1999年
- 2) 開仁志「よりよい教育実習のための指導の在り方について」『日本保育学会第58回大会発表論文集』、日本保育学会第58回大会準備委員会、2005年

〈資料〉

【学生用アンケート項目】

- 1 担当教員に実際受けた指導で、役に立った、心に残ったことは何ですか？
- 2 もっと、現場の先生に、実習の中でこの部分を教えて欲しかった、学びたかったことは何ですか？
- 3 大学で学んだことと現場のギャップを感じましたか。はいかいいえで答えてください。
- 4 「3」で、「はい」と答えた方は、どんなギャップを感じましたか。
- 5 大学の授業の中で、実習に生かされたと思うことは何ですか。
- 6 幼稚園や保育所の先生に、実習以外で関わるとしたら、どのようなことを望みますか。選択肢の中から、いくつでも選び、数字に○をつけてください。
 - ① 大学の中で、実技（教育技術）を教える欲しい。
 - ② 実習以外で、幼稚園、保育所を訪れ、実際に子どもとかかわりたい
 - ③ 総合演習など、研究テーマをもって幼稚園、保育所を訪れ、保育や子ども理解を深めたい
 - ④ その他
- 7 教育実習について感想、要望があれば自由に書いてください。

【指導教員用アンケート項目】

- 1 指導において、心がけたこと、大事にしてきたことは何ですか？
- 2 指導において困ったこと、悩んだこと、わからなかったことは何ですか。
- 3 指導でうまくいったことは何ですか？
- 4 大学教員に対して、実習とのかかわりで何を望みますか？
- 5 その他、実習について、ご自由にご意見ご感想を書いてください。